慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	第10講 : カント ; 純粋理性批判 ; 観念論の発見
Sub Title	
Author	石川, 史郎(Ishikawa, Shirō)
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史 ; 哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.235- 266
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学理工学部大学院講義ノート
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000-0235

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

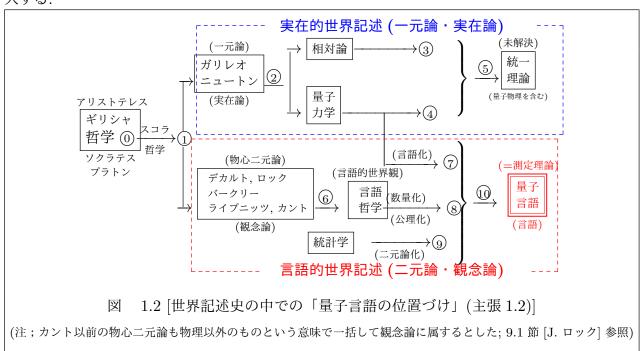
第10講

カント;純粋理性批判; 観念論の 発見

「理系の西洋哲学史」

目次; 他

下図のように, ガリレオとデカルトあたりから, 世界記述史は本格化する. 本講からカントに突入する.



本章では, 近代哲学の華:



の「カントの集大成」を議論する. コペルニクス的転回 (=観念論の発見) は, 近代哲学最大の成果

である. この功績は、カントの名を哲学者の代名詞と言えるほど、確固たるものにした. カントは、プラトン流の哲学の語り方:

世界はこうである

(‡1) 空想的言語的世界記述 序章・方便・フィクション・前振り すなわち、

- (\sharp_2) 【世界がこうなっている】は二の次 (方便・フィクション・前振り) 『純粋理性批判 (1781)』
- (‡3) 【我々はこう生きるべき】がメインの主張 『実践理性批判(1788)』,『判断力批判(1790)』,『永遠平和のために(1795)』 を完全に実行したわけで,当然のことであるが,哲学者としての最大級の評価を得た. そうだとし ても,本書の興味は純粋理性批判である.



Kant can't understand Kant?

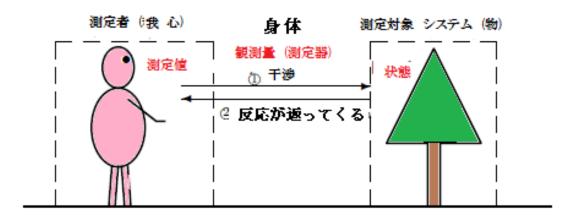
10.1 ご冗談でしょう. カントさん: 二律背反 (アンチノミー)

10.1.1 本節の主問題

前章「第9講:近代哲学 (ジョン・ロック, ライプニッツ, バークリー, ヒューム)」はデカルトの各論で、

- ジョン・ロックの第二次性質
- ライプニッツに生得説
- バークリーの「存在するとは知覚されること」
- ヒュームの「因果関係」

等はどれも「二元論の追究」としては、「デカルトからのそれなりの進歩」かもしれない. しかし、デカルト図式 [二元論] をテーマにした文芸的エッセイみたいなもので、「大きな進歩」ではなかった.



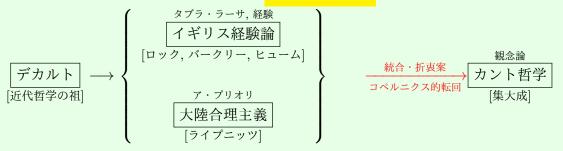
[デカルト図式]測定:(=①+②):のイメージ (図1.1)

図 10.1 デカルト図式 (=図 1.1): 測定のイメージ図 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第 3 講)

本章の主問題

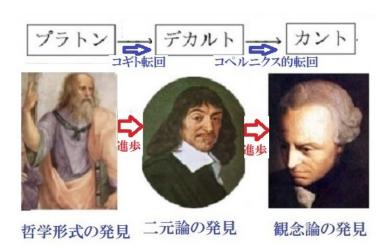
近代哲学 (ジョン・ロック, ライプニッツ, バークリー, ヒューム) の進歩問題は各論で見方によって是非が変わる. たとえば, これらを実体二元論としてしまうと, 本書的には退歩という見方も可能になってしまう. しかし, 哲学者としての最大級の評価を得ているカントについては進歩問題を曖昧にするわけにはいかない. 次の問題は最重要である.

問題 10.1. 次のコペルニクス的転回は 進歩か?



(注): 上のコペルニクス的転回が「進歩」でなかったとしたら、本書的には非常に困る. 一応の解答を本章の最終節 $(10.5\,\text{節})$ に書く.

要するに,本節の目的は,上の問題を肯定的に解答して,



を完成することである.

10.1.2 三批判書





イマヌエル・カント(1724年 - 1804年)はプロイセン王国(ドイツ)の哲学者であり、ケーニヒスベルク大学の哲学教授・総長であった。ケーニヒスベルクは、一筆書き問題の「ケーニヒスベルクの橋」で有名であるが、現在はロシア領でカリーニングラード。ケーニヒスベルク大学は東欧有数の名門大学だったが、第二次大戦で打撃をうけて閉鎖された。卒業生に、ワイエルシュトラス、ミンコフスキー、ヒルベルト、ゾンマーフェルト等のビッグネームが並ぶ。

カントは、近代において最も大きな影響力を持つ哲学者で、主著は『純粋理性批判(1781)』、『実践理性批判(1788)』、『判断力批判(1790)』であり、それぞれのテーマは「真 (本書的には、真もどき)」、「善」、「美」である. この順序はプラトン以来の「哲学の述べ方」に従ったものだろう. すなわち、

そうだとしても、本書の興味は「純理」である.

本書では何度も述べていることであるが,世界記述の哲学は「前振り」に過ぎないわけで,これに目くじらを立てるのは大人げないかもしれない.世界記述の哲学で科学として成功した哲学は無いわけで(正確には,二元論的観念論で科学として成功したのは量子言語だけ),カントにとっても,「純粋理性批判」はそういうものだと思った方がよい.

純理が「真理もどき」でなくて、「真理」だったとしたら、(A)を遂行したカントは超人で、

• ノーベル物理学賞・文学賞・平和賞を取ったみたい

なってしまう.

カントは (A) を忠実に実行したので,

(B) カントの目論見通りに事が運んだ

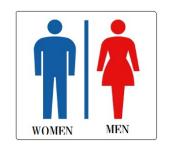
と思う.

♠注釈 10.1. ここまでも繰り返し述べていることであるが、世界記述の哲学とは「断言された虚構 (3.2 節:プラトン)」であるが、それを認めてしまうと宗教と区別が付かなくなってしまう. したがって、哲学の出だしは、嘘でも「理性、論理」等の単語から始めなければならない. 「純粋理性批判」、「論理哲学論考」等である. 穿って考えれば、「理性、論理」という迷彩は、西洋哲学がキリスト教と共存するための (キリスト教に吸収されないための) 必死の生き残り作戦だったとも言える. また、「理性、論理」を強調しなかったとしたらコギト命題「I think "I think、therefore I am"」は禅問答のような小話以上には成り得なかったに違いない.

10.1.3 二律背反 (アンチノミー)

カントは、『純粋理性批判』の中で、

(C) ある命題 P については、「命題 P は正しい」と「命題 P は正しくない」 の両方が成立する





そして、これを『アンチノミー (二律背反)』と呼んだ.

P > F / S - 10.2. [4 \(\tau \) O > F / S - 1]

カントは次の4つのアンチノミーを発見したと主張している.

- (D₁) 世界は時間空間的に有限である
- (D₂) 世界におけるどんな実体も単純な部分から出来ている
- (D₃) 世界における一切は自然法則に従って生起する
- (D₄) 世界の因果の鎖の中には絶対的必然的存在者がいる

証明

命題 $(D_1) - (D_4)$ はいずれも意味不明な「命題」であるが、たとえば、命題 (D_1) に関して言えば、空間なり時間なりは有限であるのか、無限であるのか、という問いかけであり、

- ●「有限」と主張すれば、「その先はどうなっているのか?」と問われて困る. よって、命題 D₁ は正しくない
- •「無限」と主張すれば、「今に至るはずはないではないか?」と問われて困る. よって、命題 D_1 は正しい

したがって,

命題 (D₁) はアンチノミーである

らしい.

////

(注) 命題 (D_1) - (D_4) はいずれも意味不明な言葉の羅列であって、言葉遊びにすぎない.

それにしても,

ご冗談でしょう. カントさん」

と言いたくなる.

本書では繰り返し述べていることであるが,世界記述主義「世界記述から始めよ」を忘れてはならない. 2000 年以上も前にゼノンがしつこく指摘したことであるが,日常言語の論理は当てにならない,具体的に言えば,日常言語内の議論では,

(E) ゼノンのパラドックス (cf. 2.4 節), アリストレレスの三段論法 (cf. 4.3 節), アウグスティヌスの「現在しか無い」(cf. 6.1 節), アンセルムスの「神の存在証明」(cf. 6.4 節), 世界五分前仮説「世界は実は 5 分前 (の過去) に始まったのかもしれない」に惑わされたり (cf. 補足 6.1) 天動説と地動説の区別が曖昧になってしまう (cf. 第 7 章), デカルトの

240 「理系の西洋哲学史」 <mark>目次; 他</mark>

コギト命題を疑う余地のない命題と思ってしまう (cf.~8.2 節), ハイゼンベルグの不確定性原理 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] の第4講)

等の「哲学パズル」が出現する (また, 文献 [KOARA 2018; コペン] を参照せよ). このことをカントは全く理解しなかったのだろうか? などと「カントにいちゃもんをつける」と, カントに次のように言われてしまうかもしれない.

(F) そんなにむきにならないで下さいよ. プラトンのイデア論と同じで,「純理」は前振りですよ. 哲学者の世界記述が科学的に成功したことなんて一度もありませんよ. 難しく書いたのは,「難しい」と有難がる哲学愛好家が多いからですよ.

「純理」で自慢できるのは「コペルニクス的転回」という命名だけですよ. 本気なのは、「実践理性批判」からですよ.

著者は「カントの本心はこうでないと困る」と思っている. そうだとすれば, 哲学者とはかなり疲れる職業かもしれない. 「生真面目な堅物」 というカントのイメージまでが, カント哲学の説得力の一部になっているのだから.

さらに、カントにはこう言ってもらいたい.

(G) 数学や物理学は一般大衆が理解できなくても普通なのだから、難しくなりますよ.フェルマー予想とかポアンカレー予想が解けたみたいだけど、これらの証明を読める数学者なんて世界中でもほとんどいないでしょう.しかし、一般大衆に支持されなければならないという宿命・制約条件のもとに、哲学は創作されているのですから、真の意味で難しい哲学なんてありませんよ.「難しい」とは言っても、「ベストセラーを作る難しさ」は半端ないですよ.文学の一種ですからね. 読者層としては中の上程度の偏差値をターゲットにするということです.そうでないと売れませんからね.しかし、「有難味」を演出するために、「難しさ」を加味する文章テクニックは哲学に不可欠でしょうね.

など大抵の理系の思っていることであるが、本音をポロリと漏らすようでは大哲学者にはなれない. そうだとしても、本書的にはカントは偉大な哲学者でなければ困るわけで、

カントを最上級に持ち上げたストーリー

を述べる.

注意 10.3. さて, 西洋哲学史を書く際に次が最重要で,

(H) なぜカントは偉いのか?

である.この答え方によって、「作者の哲学」の鼎が問われると思う.

241 「理系の西洋哲学史」 | <u>目次</u>; 他

カントはプラトン流の哲学の語り方に従った. しかし,最初の「純理」のところは,「アンチノミー」でもわかるようにあまりにも幼稚だと思う. そこで低評価しか得られなかったとしたら,「一事が万事」でその後の「実理」,「判断」もまともに読んでもらえないのではないか?と思ってしまう. 幼稚な「純理」が,なぜ高い評価を得られたのだろうか?

本講では(というより,定説に見習って),その理由を

(I) 「コペルニクス的転回」を宣言したこと

と考える. 哲学書とは何百ページの平均値で評価されるものではなくて, その中で一行 (ワンフレーズ) でも光るものが書かれていれば名著とされるもので, 「コペルニクス的転回」がその一行なのだと思う. そして, 哲学書とは, 「その一行だけで他は駄作」という評価はされないものなのだと思う.

哲学とは、キャッチコピーのこと

なのだと思う.

♣ 補足 10.1. 純理の出版は 1781 年, ガウスは 1824 年に「非ユークリッド幾何学」を発見したのが, しばらくの間その発見を伏せていた. 1830 年前後に, ロバチェフスキーやボーヤイが発見したときに, 「実は, 私も数年前に発見しているんだよ」とガウスが言ったらしく, 物議を醸しだした. ガウスが「非ユークリッド幾何学」の公表を遅らせたのは, カント学派との軋轢をさけるだったという話もどこかで聞いたことがあるが定かではない. 当時の理系の大物 (ラグランジュとかガウスとかラプラスとか)の「純理」に対する感想を知りたいものである. 産業革命とフランス革命で忙しかったのかもしれないが.

 242
 「理系の西洋哲学史」
 目次; 他

10.2 カントの認識論; コペルニクス的転回

10.2.1 カントの純粋理性批判 (MSN エンカルタ百科事典より)

マイクロソフト社の MSN エンカルタ百科事典(2009 年 DVD 版)の「カントの純粋理性批判」の説明は以下の通りである.

説明 10.4. (次章の説明 11.1 の準備)

純粋理性批判: MSN エンカルタ百科事典より

[純粋理性批判] で明らかにされたのは、人間の [認識] 能力は、世界の事物をただ受動的に [模写する] だけではなく、むしろ世界に能動的にはたらきかけて、その認識の対象をみずからつくりあげるということである。 つくるとはいっても、神のように世界を無からつくりあげるわけではない。 世界はなんらかのかたちですでにそこにあり、[認識] が成立するには、感覚をとおしてえられるこの世界からの情報が材料として必要である。 しかし、この情報はそのままでは無秩序な混乱したものでしかない。 人間の [認識] 能力は、自分に本来そなわる一定の形式(=アプリオリな総合判断・認識)をとおして、この混乱した感覚の情報に整然とした秩序をあたえ、それによってはじめて統一した認識(=ポステリオリな認識)の対象をまとめあげるのでなければならない。 カントによれば、[認識] にそなわるその形式(=アプリオリな総合判断・認識)とは、

- (i) 感性の形式(時空等)
- (ii) 悟性の形式(たとえば,単一か多数かといった分量の概念や,因果性のような関係の概念 など

である.



そうだとすれば、「すべての物は時間と空間のうちにある」とか「すべては因果関係にしたがう」という命題は経験的には証明できないにもかかわらず、すべての経験の対象に無条件にあてはまることになる。というのも、空間や時間や、因果関係といった形式によってはじめてその対象が構成されるからである。それはたとえば、すべての人間が緑のサングラスをかけた場合、「世界は緑である」という発言がすべての人間にとって正しい発言とみなされるのに似ている。

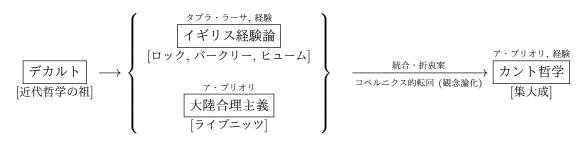
以下にこれを説明する.

243 「理系の西洋哲学史」 <u>目次</u>; 他

10.2.2 カントの統合・折衷案

さて,

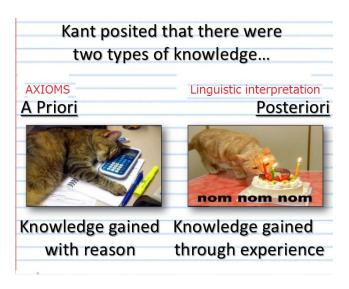
(A) カントの純粋理性批判は、大陸合理主義とイギリス経験論の折衷案とされている。 すなわち、



である.

折衷案という意味は、以下の通りである. 人間に本来に(=ア・プリオリに)そなわるその形式とは、

- (B) ア・プリオリな認識:「感性(直観)の形式(時空等)」と「悟性(思考)の形式」であり、「大陸合理主義」的であり、「タブラ・ラーサ(白紙)」ではない.しかし、
- (C) ポステリオリな認識: 経験を通して認識力・判断力が徐々に形成されていくとした. つまり、「イギリス経験論」的である.



よって,

 ア・プリオリな認識
 ポステリオリな認識

 カントの統合・折衷案
 大陸合理主義
 + イギリス経験論

となる.

本書的には、上のカントの折衷案を手放しで称賛するわけではない. 本書の推奨案 (第 11 章 の [まとめ 11.3] で述べる) をこの時点で以下のように述べておくので、カントの折衷案と比べてほしい.

- **♠ 注釈 10.2.** (=まとめ 11.3)「認識」ではなくて、「言語」を想定するならば、いろいろな言語体系(日常言語、数学、ニュートン力学、量子言語、・・・)のなかで、
 - (‡1) 日常言語はイギリス経験論的である (cf. 注釈 9.3)
 - (‡2) 数学は大陸合理主義的である (cf. 注釈 9.7)
 - (世3) 量子言語はカントの折衷案的である

と言える. 量子言語には、言語ルールが初めに決められているので、「タブラ・ラーサ(白紙)」でない. また、経験を通して【記述力(言語的コペンハーゲン解釈)】が徐々に形成されていくわけで、カントの折衷案的である.

10.2.3 コペルニクス的転回:模写説から構成説へ

さらに、純粋理性批判で、カントは次のように考えた.

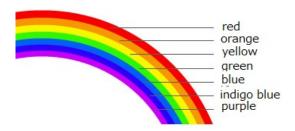
(D)「世界」は人間の認識能力というメガネを通して, 把握する以外にすべはない. カラスはカラスの認識能力というメガネを通して, 「世界」を理解しているに違いない. したがって,

カラスには「カラスの世界」, ダンゴ虫には「ダンゴ虫の世界」

があるに違いない.人間よりシャープな認識力を持つ宇宙人がいたとして,そうならば,「その宇宙人の世界」があるに違いない.認識能力の違いにより,全く「別の物」が見えるとしても,そこには「何か」があるはずで,それを「物自体」と呼ぼう

である.

- 補足 10.2. (i): 上の (D) の「人間よりシャープな認識力を持つ宇宙人…」は自信がない. 最後の問題 12.3 でも述べることであるが, 人間よりも格段に能力の高いスーパー量子コンピュータはそんなに遠くない未来に実現するだろう. このとき, 「スーパー量子コンピュータの思考過程を人間が理解できるだろうか? 統計学 (\approx 量子言語) も不要になるのだろうか?」は現時点で著者にはわからない.
 - (ii): カントの認識論において、「虹は七色か?」はよく引き合いに出される. 日本では7色:



世界では様々な慣習があるみたいで, たとえば,



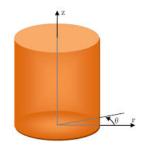
らしい. つまり、「そう信じて見れば、そう見える」ということ. 「七」と言えば、七音音階も不思議で、日本ではもともとは五音音階だった.

♣ 補足 10.3. 鏡も不思議である.

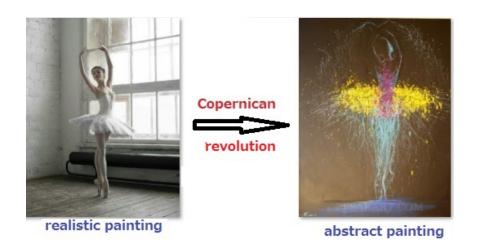
右は左に見えるし, 左は右に見える しかし,

上は上に見えるし,下は下に見える





脳内に円筒座標のようなものが埋め込まれているのかもしれない.



すなわち、「世界があって、それを模写するように認識している」のではなく、「認識者はその 認識能力に応じて、世界を構成している」のである. いわゆる、

「(写実画のような) 模写説」から「(抽象画のような) 構成説」











つまり,

 (E_1) 「世界が先で、認識が後」でなくて「認識が先で、世界が後」

を主張して、これをカントは

(E₂) 認識論の <mark>コペルニクス的転回</mark>:

 (実在論)
 (観念論)

 世界が先で,認識が後
 コペルニクス的転回 (観念論化)

認識が先で,世界が後

と呼んだ.

要するに、

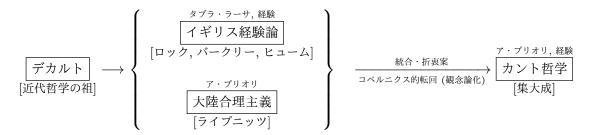
である.



- ♠ 注釈 10.3. 量子言語では、「物自体」という概念が、測定以前に存在するわけではない. しかし、1.1.2 節の言語的コペンハーゲン解釈 (E_3) で述べたように、最優先されるのは、「測定器」であって、「物 (自体)」ではない.バークリーの言葉:
 - 存在するとは知覚されることである.を思い出そう.

10.2.4 カントは何故偉いのか?

結局, 次を得た.



である.

そうだとして、次の疑問は理系ならば当然だろう.

問題

問題 10.5. (注意 10.3「なぜカントは偉いのか?」の続き)

- (‡₁) なんでこの程度の幼稚な考えに「コペルニクス的転回」などと大袈裟な命名をしたのだろうか?
- (‡₂) なんでこの程度の幼稚な考えによって,カントは近代哲学の最高の哲学者の地位をえたのだろうか?

要は,

カントは何故偉いのか?

であり、これを以下に答える.

というか, 答えは決まっているわけで, もちろん,

★ カントが哲学 (i.e., 観念論) を発見した

からである.

●「ニュートンは何故偉いのか?」の答えは、「ニュートンが古典物理学の発見者」以外にないのと同じである.要するに、

実在的世界記述法 (古典物理の発見者) ···ニュートン (極言すれば, ガリレオ, ニュートン以前は星占いみたいなもの)

言語的世界記述法 (観念論の発見者) …カント (極言すれば、カント以前はオカルト観念論みたいなもの)

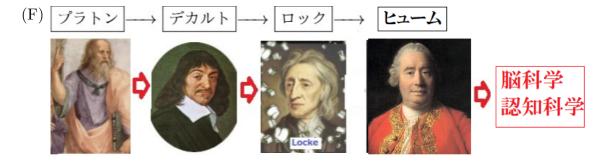
である.

カントに対する称賛の大きさを鑑みれば、これ以外に答えがない.

- ♠ 注釈 10.4. 「観念論の発見者」という言い切りに異論があるかもしれない. 本講の論法はすべて「量子言語」からの逆算である. すなわち、
 - •「量子言語が観念論のお手本とする」ならば、 $\bigcirc\bigcirc$ 理論は観念論と見なせるか? と考える。こう考えて、カントの仕事を観念論の嚆矢と見なした (cf. 第 11 講). 「観念論」の定義など無い、広辞苑を引いても「定義」など書いていない。

もうすこし詳しく見ていこう.

もしカントがいなかったらば、次が予想されたと思う.



カントは次のように思ったのだろう.

これは哲学ではない. すくなくとも,「哲学の本流」にはなり得ない. 哲学とは,科学が未熟な状態のことではない. 行き着く先が科学だったら,「未熟な科学の状態」であって,それは哲学ではない. つまり.

• (F) だったとしたら, 結局 (世界記述の) 哲学なんて無かったことになる

さて,

● 科学未満において、一番重要で難しいのは、科学的議論がなされる土壌を形成すること

である. まだ科学的議論がなされる土壌が形成されていない時期に, なにかを主張したとしても, 文芸的エッセイに過ぎず<mark>「ただ言ってみただけ」</mark>と見なされたとしても仕方がない. (F) だったとしたら, プラトンからヒュームまでのすべては妄想と見なされても文句は言えない. とカントは考えたのだと思う.

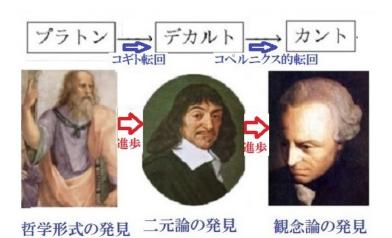
●「200年早すぎた妄想」では哲学にはならない

妄想と哲学は違う

哲学の行き先は, 科学 (形而下学) であってはならない. 二元論的観念論 を目指さなくてはならない

と考えて,哲学の方向を次のように示した.哲学を妄想・小話・禅問答の域から,観念論という学問の域に高めた.

(G)



本書の言葉では,

[<mark>二元論的観念論</mark> を目指す・追究する] = [<mark>量子言語</mark> に近づく]

(第一章 1.5 節の主張 1.9 参照), だから, (G) の「進歩」は当然である.

カントは「観念論の発見」を

(H) 認識論の **コペルニクス的転回**:

 (実在論)
 (観念論)

 世界が先で, 認識が後
 コペルニクス的転回 (観念論化)

認識が先で, 世界が後

と呼んだ. それにしても, 「大袈裟な名前を付けたものだ」と思うかもしれない. そうだとしても.

- (I)「こっちの勝手な都合で、世界を構成・記述する」という観念論的思考が哲学の奥儀である ことは、プラトンのイデア論「師ソクラテスの倫理哲学に都合がいい世界(イデア界)の提案」以 来の伝統に準拠している.
 - カント以前は、「霊的オカルト的観念論」とか「気分的観念論」しかなくて、 観念論モドキだった。

実在論では処理できそうもないことがらを一括して「観念論」と言っていたに過ぎなかった. そこで、

「本当の観念論を初めて発見した」という意味を込めて、カントは「コペルニクス的転回」と言った

のだと思う. そして.

(J) カントの偉さは、認識論が脳科学の未熟状態に突入することを阻止し、「コペルニクス的転回」という派手な名前で、哲学は観念論であるべきと主張したこと

と考える.

「コペルニクス的転回」という命名は、カントの自画自賛というわけではなくて、「認識論は 科学ではなくて哲学(観念論)なんだ」というカントの強い思いが込められているのだと 信じたい.

カントは「観念論を発見した」と確信した. 「観念論 \approx 哲学」なのだから, 「(世界記述の) 哲学を発見した」と確信したのだろう. そうだとしても,カントはこの発見が一般に受け入れられて理解されるかどうかに自信が無かったのだと思う. 当然だろう. 純理 (=純粋理性批判) も「真理もどき」に関する文芸的エッセイの域を脱していないからである. それでも, (F) の道 (科学への道) だけは絶対阻止しなければならない. 実直でまじめなカントが一世一代の大言壮語「コペルニクス的転回」を言い出すということは余程追い詰められていたのだろう.

(K) 純理には自信がないけど、(F) の道 (科学 (脳科学・認知科学・AI) への道) だけは絶対阻止しなければならない.

近代哲学(認識論)の行き着く先は、観念論でなければならない

である. 行き着く先は, 実験科学 (脳科学・認知科学) であってはならない. 実験不要の形而上学 (観念論) でなければならない. 科学と哲学は違う. 融合という誤魔化しをしてはならない.

カントは哲学が完全にわかっていた

のだと思う.

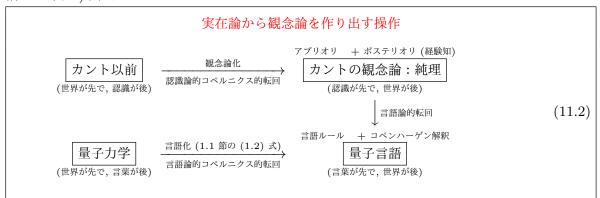
要するに,

実在的世界記述法 (古典物理の発見者) ···ニュートン (極言すれば、ガリレオ、ニュートン以前は星占いみたいなもの)

言語的世界記述法 (観念論の発見者) ・・・カント (極言すれば、カント以前はオカルト観念論みたいなもの)

である. しかし、世界記述法が違えば、その理解のされ方(称賛され方)も違ってくる.

- ニュートンは直ちに一部の人たちに正確に理解され、徐々に一般にも正確に理解されるようになり、ニュートンは不動の地位を得た.
- カントは直ちに多くに称賛されたが、カントの真意を正確に理解した人がいたかどうかは 不明と思う. それでも、哲学はファッションである. 「偉大な仕事である」という一般大 衆の正確な直感が、カントを祭り上げて、カントは不動の地位を得た.
- ♠ 注釈 10.5. そうだとしても、「観念論 (コペルニクス的転回)」の意味がまだ読者に伝えきれていないかもしれない. この真の意味は次章「言語哲学 (総括 11.2)」で説明するが、今のところは、次の (総括 11.2 内の) 図式:



で一応納得して, 進んでもらいたい. カントの観念論は未熟だったかもしれないがその発想は称えられるべきで, やはり,カントを<mark>観念論の祖</mark>としたい.

これだけでは納得してもらえないかもしれないので次を補足しておく.

何度も言っている「本書の論法は、すべて量子言語からの逆算」である. すなわち、次の論法である.

● 二元論的観念論の完成形は量子言語である. したがって, 量子言語を理解しなければ, 観念 論の意味はわからない. .

量子言語を理解して観念論の意味がわかって, それからカントのコペルニクス的転回の意味がわかる. そうすれば,

◆ カントの観念論は未熟だったかもしれないがその発想は称えられるべきと思うはずで、そこで、カントを 観念論の祖 としたい

という順序である. たとえば, 広辞苑で「観念論」を引いても無駄なわけで, これは当然の議論だと思う.

たとえば、「古典力学とは何か?」と問われても、広辞苑で「古典力学」を引いても無駄で、 結局、大学一年の通年分の講義を理解すること以外にない.

ここまで来たならば、もう著者の意図は分かっただろう. カントが本当に言いたかったことは、次である.

(L) 純理がバトンを渡すのは、「未知の観念論(謎の観念論)」でなければならない. すなわち、



でなければならない.

そうならば、「未知の観念論」を追究する我々のするべきことになる. これを次章 [言語哲学] で述べる.

- ♠注釈 10.6. 実験を行って、その結果によって修正をしながら理論を作り上げていく物理学・科学は、健全な発展が期待できる。一方、世界記述の哲学は実験で白黒つけることができないので、理屈をこねくり回すだけで、発展するどころか退化する場合もある。世界記述という看板の書き換えだけでは、車のモデルチェンジのようなもので、飽きさせない工夫にすぎない。本質的な進歩など望めないと思うかもしれない。しかし、長い目で見れば、試行錯誤を繰り返しながら、
 - (\sharp_1) 西洋哲学も確実に進歩している. 進歩して、最終的には量子言語に収束するというか、より正確に言うと、
 - (‡2) 量子言語に近づくことを, 進歩と呼ぶならば, 西洋哲学はプラトン以来確実に進歩し続けて きた.

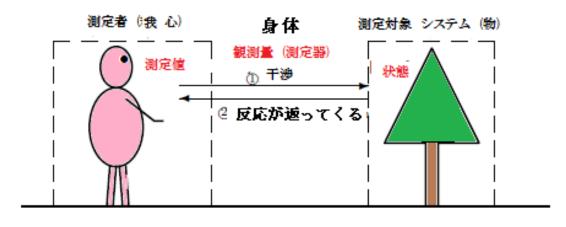
が本書の主要主張のひとつになる.

10.3 まとめ;デカルト=カント哲学

繰り返しになるが、近代哲学をまとめておく.

10.3.1 カント以前

すべてはデカルト図式 (= 20.1 + 20.1) 「物・身・心」から始まった.



[デカルト図式]測定 ;(=(1)+(2)) のイメージ (図1.1)

図 10.2 デカルト図式 (=図 1.1): 測定のイメージ図 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン] 第 3 講)

そして、「物」の方で、ニュートンが最大級の仕事 (プリンキピア:1687年) をした.これには誰もが驚愕した.事実.

ニュートン力学は世界を動かした.

これを目の当たりにしたロックは、「人間知性論 (1690年)」で

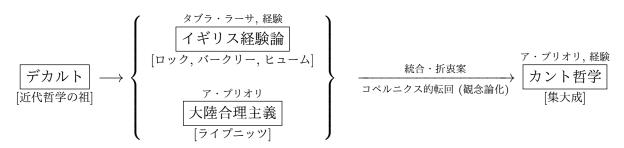
(A) デカルト図式の「物」の部分では、ニュートンにしてやられてしまった. しかし、デカルト図式の「我」の部分では、自分が頂上を極める

と考えたに違いない. ロックに異論を唱えたライプニッツの「人間知性新論 $(1703 \, \text{年})$ 」も, ニュートンを意識していないわけがない. というより, ラプニッツはニュートンだけを意識していたのだろう. こうして, 「ロック vs. デカルト・ライプニッツ」, すなわち,

イギリス経験論vs.大陸合理主義(タブラ・ラーサ, 経験)(ア・プリオリ (生得説))

の (不毛な) 構図が出来上がって、「認識論・哲学」が盛り上がった. 「不毛」になった理由は、科学の未熟な状態を哲学と思い込んでしまったことだと思う.

しかし、ともかく、バークリー、ヒュームへと繋がって「近代哲学の華」とされている次図が実現した.



プラトン以来の「哲学の述べ方」によれば、

- (B_1) 【世界がこうなっている (世界記述)】は二の次 (序章・方便・前振り) で、
- (B_2) 【我々はこう生きるべき (倫理・道徳)】がメインの主張

であったはずなのに,

 (C_1) ニュートン力学へ対抗意識が強くなりすぎて、近代哲学においては、序章・前振り [世界記述法] の認識論に力が入りすぎた

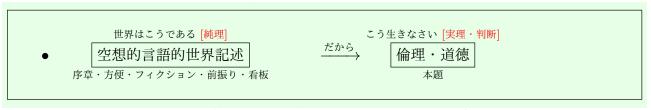
かもしれない.

前振りに本気を出してしまって、

 (C_2) デカルトからヒュームまで、「彼らが一体何をしたかったのか?」は不明.

と思う. 心とか精神とかという分野で、ニュートン力学と比肩されるべきものを作りたかったのだろうか?

前振りであることを明確に理解して、次のようにこれを実行したのはカントである.



♠ 注釈 10.7. ニュートンは, 力学, 微積分, 光学等で華々しい成功をしたが, 錬金術にも精力的に没頭していた. これは成功せずにニュートンのオカルト研究と言われていて, あまり評判がよくない. しかし, 錬金術は目的が明確で成否がはっきりするという意味では理系的とも言える. 哲学としての認識論は目的が不明で, 成否があいまいだったと思う. そうならば, 本講のテーマに戻るが,

が進歩かどうかは一概に言えないが、本講の論法はすべて「量子言語」からの逆算である. すなわち、

● 上が量子言語に近づているかどうかで「進歩」か否かを決めようである (*cf.* 本章 10.5 節, 第 11 章). しかし, もし彼ら (デカルト,..., ヒューム) が実体二元論という実在論を目指していたのだとすると退歩ということになってしまう.

10.3.2 カント登場の必然性

しかし、カントの頃 (1770年代) になると

認識論の賞味期限が切れ掛かっていた

のだと思う. 認識論は 250 年以上早すぎる科学的テーマの可能性があると多くが感じてしまって,「誰か,終了宣言をしてくれ!」という空気が社会に充満していたのだと思う.

(D) ニュートン力学は世界を動かした. しかし, 認識論は流行しただけで, 世界は動かなかった. 250 年早すぎたのでは? そもそも, 「認識論」って重要なのか? 認識論は無くてもよかったのでは?

である.

または,

● ニュートン力学 (プリンキピア) は、ライプニッツ、ベルヌーイ、オイラー、ダランベール、ラグランジュ、ラプラス等によって、進歩しているではないか

である. そうならば.

(E) 誰か、「認識論」を上手く収束・収拾させてくれ!

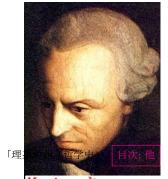
が時代の空気だったとして、その空気に乗ったのがカントで、カントの統合とは、「統合」という名の終結宣言だったのだと思う.

(F) カントの偉さは、「コペルニクス的転回」という派手なキャッチコピーで、観念論を提唱して、認識論が脳科学に突入することを阻止しようとしたこと

近代哲学(認識論)の行き着く先は、観念論でなければならない

と考えたことである.

実は、「コペルニクス的転回」は哲学的宣言であって、次の第 11章 (総括 11.2 内の図式: 実在論から観念論を作り出す操作)で述べることであるが、「コペルニクス的転回」を、さらに「言語論的転回」をすることによって、量子言語の精神が生まれる.



Kant can't understand Kant?

256

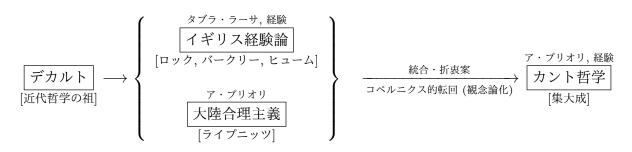
認識論を科学的に考えることは、哲学的にならないことをカントは分かっていた。もちろん、これは当然のことで、「認識」の意味が徐々に明らかになりつつあるのは、つい最近のことで、脳科学の進歩により決着が付くとしても、そのときは、魂、知性、観念、思考、認識、等の大雑把な言葉ではなくて、数量化された多くのパラメータで表現されているだろう。

そして, そのような形で「科学的に解決」されたとしても, もはや哲学ではない. 脳科学は実験 もしないで, 天井を見ながら考えているだけで結論が出るような分野ではない. カントは,

- 実験(数式)無しの科学が哲学ではない
- 科学の後追いの文芸的エッセイが哲学ではない
- 科学の仮説を先取りして主張するのが哲学でない

ことを十分理解していたのだと思う. ましてや, 科学者と一般人との仲立ちをするのが哲学者ではない. 評論家と哲学者は違う.

そして、結果的には、 カントの統合:



によって, 認識論の熱がフェードアウトした . (当然の疑問「何でこの程度ことで, 『観念論の発見』と言えるのか?」については第 11 講を見よ)

そして, この「認識論からの解放」によって, 「マジックフレーズ (ことわざ) の哲学」, すなわち,

- (H₁) ベンサム (1789年): 「最大多数の最大幸福」
- (H₂) ヘーゲル (1770年 1831年): [正反合 (弁証法)]
- (H₃) ダーウイン (1809 年 1882 年):「適者生存」
- (H₄) ニーチェ (1844 年 1900 年):「神は死んだ」

に繋がった.

10.4 未解決問題;因果関係とは何か?

本節は、

● 文献 [KOARA 2018; コペン] 第8講

からの抜粋.

10.4.1 「因果関係とは、何か?」に対する4つの解答

4.2 節 [運動変化の根源は何か?] で述べたように、「運動・変化の本質は何か?」については、「因果関係」という言葉で、一応、決着した. しかし、これですべてが解決されたわけではない、我々は、未だ「因果関係」について十分な理解に至っていない、実は、

問題 10.6. 問題:

「因果関係とは何か?」

は科学における最も重要な未解決問題である. これに答えよ.

もちろん, 古い話をしているのではない.

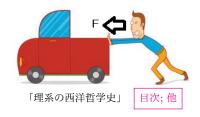
今日的意味での未解決問題である.

こう言うと、意外に思う読者がいるかもしれない.以下に、この問題に対する解答の歴史を整理しておく.

- (a) **[実在的因果関係]:** ガリレオ,ベーコン,デカルト等のアイデアの総決算として,ニュートンは,ニュートン力学という実在的記述法を提唱して,次のように考えた:
 - 世界には、実際に「因果関係」が存在している.この実際に存在する「因果関係」を、 微分方程式─因果関係の連鎖の方程式─で忠実に記述したのが、ニュートンの運動方 程式である.

この実在的因果関係は、極めて自然な考えで、これ以外に考えようがないと思うかもしれない、事実、

ニュートン力学 ― 電磁気学 ― 相対性理論 ― ・・・



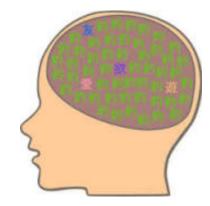
と続く実在的因果関係の潮流は、科学の華と言っていいだ ろう.

しかし、別の考えもあって、以下のように3つの「非実在的因果関係」がある。

- (b) 「認識的因果関係」: 哲学者ヒューム, カント等は, 次のように考えた:
 - 世界には、実際に「因果関係」が存在するとかそうでないとか言えない、そして、世 界の「何か」を,我々が『因果関係』と感じたとき,その「何か」に「因果関係」が あると信じればよい

と主張した.

これを「一種のレトリック」と思う読者がいるかもしれないし, 逆に,「そう言われてみればそうかもしれない」と納得してしま うかもしれない.確かに、「因果関係」という色メガネで見てい るから、そう見えるだけのことかもしれない. 因果関係の認識回 路が脳内に設置されていて、それが「何か」に刺激されて反応す るときに、「因果関係がある」とするのが、カントの有名な「コペ ルニクス的転回(すなわち、「認識が世界を構成する」)」である.



この (b) がそれ以後の科学に与えた実質的な影響については、疑問を呈する方が多数派だと思う が、本書では(下の(d)で述べるように)、カントに最大限に好意的なストーリーを採用する.

- (c) [数学的因果関係 (動的システム理論 (=統計学))]: 動的システム 理論は、工学における数学的手法として発展してきたので、「因果関係とは何か?」を突 き詰めた形で答えていない. しかし,
 - 動的システム理論では、状態方程式、すなわち、時変数一階連立微分方程式:

$$\begin{cases}
\frac{d\omega_1}{dt}(t) = v_1(\omega_1(t), \omega_2(t), \dots, \omega_n(t), t) \\
\frac{d\omega_2}{dt}(t) = v_2(\omega_1(t), \omega_2(t), \dots, \omega_n(t), t) \\
\dots \\
\frac{d\omega_n}{dt}(t) = v_n(\omega_1(t), \omega_2(t), \dots, \omega_n(t), t)
\end{cases}$$
(10.1)

という数学が先にあって、その方程式で記述される現象に、「因果関係」があると考 える.

となる.

理系の普通の感覚では、「時変数微分方程式=因果関係の時間的 連鎖」と何となく思っているのだから、この(c)は了解し易いか もしれないが、日常言語の中に埋没した数学という形の典型的 な例であることには注意すべきである. ただし,「役に立つ」と

「理學の指挥哲學史496 目次: 他

いう意味では、(c) はもっと評価されるべきと考える.

(d) 「言語的因果関係 (測定理論 (=量子言

語))]: 測定理論 (=量子言語) の因果関係は、言語ルール 2 (因果関係;1.1 節) で決まる、詳しくは:

● 測定理論は2つの言語ルール1と言語ルール2 (因果関係) からなるが, 因果関係に関わるのは言語ルール2である. ある現象を測定理論という言語で記述して, 言語ルール2を用いる場合に, その現象は因果関係を持つとする. すなわち, ヒュームやカントの「脳内の因果関係の認識回路」を, 「言語ルール2という呪文」に置き換えて, つまり,

である.

要約 10.7. (a)-(d) をまとめると,

- (a) 世界が先 (b) 認識が先
- (c) (日常言語の中に埋没している) 数学が先
- (d) 言語 (量子言語) が先

の違いである.

さて,何度も言っているように,測定理論 (=量子言語) は次を主張する:

(#) 量子言語は、諸科学を記述する基礎言語である.

(このような主張は、本来、科学哲学がするべきことである) もしこれが承認されるならば、次が主張できる. すなわち、

(b) 諸科学において,因果関係とは上の (d) で主張したものである.

と言える. これが,「因果関係とは,何か?」に対する測定理論の解答であり,次節以降に, この詳細を説明する.

- ♠ 注釈 10.8. 測定理論の副産物の1つとして,形而上学的立場 (アンチ物理至上主義の言語的立場) からの未解決問題:
 - (出) 時間,空間,因果関係,確率とは何か?

に答えることができる。形而上学では、「 \bigcirc 〇とは何か?」に解答することは、 \bigcirc 〇という言葉の使い方が定まる言語を作ることである (注釈 1.3). したがって、

上の(#1)は、次の(#2)と同値で、

 (\sharp_2) 時間,空間,因果関係,確率という言葉を含む言語的世界記述法を提案することとなる. もちろん,この答えとして,本書では、測定理論 (すなわち、言語的方法の確立)を提案しているわけである. そうならば、いまのところ、

言語ルール1によって、「確率とは何か?」には答えている

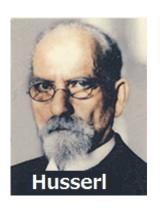
ことになる. この章では、「因果関係、時間、空間」について、答える.

10.5 「フッサールから脳科学へ」は本流か?

認識論の集大成はカントによってなされたと考える。そうならば、世論の大勢は、「カントが集大成したから、認識論は止めて、次のテーマに進もう」なのだと思う。そうだとしても、哲学 (特に、形而上学) は宗教と似ていて、一旦信じ込むと、それを捨て去ることはかなり難しい。したがって、カントの認識論をさらに発展させようという無謀な (実験無しの) 試みがあっても不思議はない。

フッサールの現象学はそのような試みの一つと思う. 知恵蔵 (朝日新聞社が提供する現代用語事典)には、「現象学」の説明として、

(‡1) フッサールは、諸学問に根拠を与える「基礎づけ」の学として現象学を構想した. 真・善・美という意味や価値の本質、また広く精神や文化に関する問いは、自然科学を中心とした実証的な学問では扱えない。それゆえフッサールは、実証的な学問についても、意味や価値を扱う学問についても、それぞれの成立根拠と範囲を明確にしようとしたのである。・・・



と書かれているが、上を読んだだけで、理系ならば「フッサールの現象学」を読まないだろう. これが本当ならば、現象学は文理を問わず大学初年度で最重要の必修科目となっているはずで、そうなっていないといことは、フッサール信者だって本音はそう思っていないということだろう. 知恵蔵通りならば、大学の文系学部の縮小を検討するなどと言い出す文科省はどうかしている. 真に受けるならば、アインシュタインの相対性理論をはるかに凌駕した理論ということになってしまう.

(‡3) なんでも「認識」に還元してしまって、それで解決したような気分になってしてしまうという広義の自己言及的トリックを楽しむ文化

を全面的に否定するつもりはないが、生産性という意味では期待できない. カントの高みを乗り

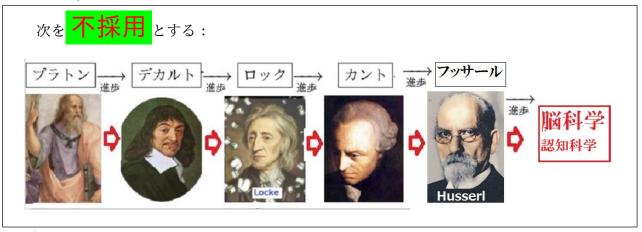
越えようとしたのがフッサールというのが一部の定説かもしれない. しかし,本書流の言い方で述べるならば,フッサールの仕事は脳科学・認知科学を題材とした SF(サイエンス・フィクション)の一種と思う. 「認識」とか「心」とか「脳」とかに理系が欲する哲学があるとは思えない.理系ならば,そのような分野で哲学を探そうとするのではなくて,認知科学とか脳科学とかの実験科学に突き進むべきと思う. 最先端科学の成果を一般人に広報する仕事の重要さは十分わかっているつもりであるが,それと哲学は違うと思う. フッサールについての著者の知識はほとんど皆無に近いが,「理系のための哲学」でないことは確信できる. 理系ならば,フッサールは読まない.

まとめると.

• カントの高みを乗り越えたのがフッサールで、これが現在の脳科学、認知科学、AIの隆盛に繋がったという哲学サイドからの定説

を本書では採用しない.

すなわち,

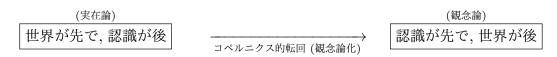


不採用の理由は,

● 哲学は、科学の未発達の状態ではない. 行き先が科学であってはならない.

と思うからである. つまり、

● これでは, カントの [コペルニクス的転回 (観念論の発見)]:



が台無しになってしまう.

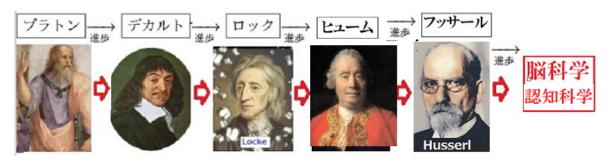
折角, 観念論を作ったのに, 科学の未発達の状態のままになってしまう

と思うからである. 哲学の行き着く先は観念論 (形而上学) でなければならない.

もし上を信じるならば、認知科学とか脳科学とかの実験科学に突き進むべきなのに、そうしないとしたら、本気では上の「進歩」を信じていないのでと思う。科学が発達する前の妄想が哲学というのは、哲学者に非常に失礼と思う。科学者ならば、「妄想を如何に実験検証するか?」に集中しているはずで、妄想だけを発表することなど決してしない。人類文化史上一つだけ科学以前の妄想が許される例外があるとしたら、科学も誕生していない 2000 年以上も昔の「デモクリトスの原子論」だけだろう。

不採用

そうだとしても、認識論が脳科学・認知科学に向かって進歩してきた、というストーリーを全否 定するわけではない. しかし、もしそうなら、観念論のカントを外して、次の図を採用すること になる.



これならば、「一応、筋が通っている」かもしれない. しかし、大多数の哲学愛好家がこの「カント抜きの図」に同意するとは思えないので、不採用とする.

- ♠ 注釈 10.9. 本書は「理系のため」という立場の議論に終始している. 「脳科学をやるならば,フッサールなど読まないで実験をしろ」という当たり前のことを言っているに過ぎない. (理系大学院以外の)一般の人たちがフッサールや心の哲学を読めば,それなりの感じ方・使い方があるかもしれないわけで,そういうことを否定しているわけではない. しかし,そもそも,
 - 諸科学を記述する言語が量子言語なのだから, 脳科学がいくら進歩しても, 量子言語で記述できない命題 (たとえば, クオリア問題) が明らかになることはない.

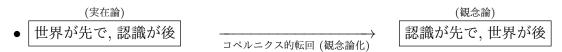
もちろん、脳科学とは別であるが、「量子言語で語りえぬ命題」に対して「沈黙する」する以外に方策があるのかを追究することは意義がある。 たとえば、「量子言語で語りえぬ命題」たちを収集して、それらを分類できれば面白いかもしれない (cf. 問題 12.3).

10.5.1 カントは何をやったか?

「まえがき」でも書いたように、本講の論法はすべて「量子言語」からの逆算である. すなわち、

●「量子言語が二元論・観念論のお手本とする」ならば、○○理論は二元論・観念論と見なせるか?

と考える. そうだとすると,やはり,カントと言えば,「コペルニクス的転回」である. カント 以前は「霊的オカルト的観念論」しかなくて,観念論モドキだった. 実在論では処理できそうも ないことがらを一括して「観念論」と言っていたに過ぎなかった. カントの「コペルニクス的転 回」によって,「観念論」の意味が明確になったと考える. すなわち,



● カントの「コペルニクス的転回」は「観念論の発見」の宣言である

と考える.

したがって,カントの [観念論の発見] を加えて,次を 採用 する.



本書の言葉では,

[<mark>二元論的観念論</mark>を目指す・追究する] = [<mark>量子言語</mark>に近づく]

(第一章 1.5 節の主張 1.9 参照), だから、上の「進歩」は当然である.

しかし、 **冷静に振り返ってみると** : プラトンからカントまで, 文学・文芸を楽しんだだけで.

理系にとって、得る物は何一つない

ことは確認しておくべきだろう. もちろん, 文学部哲学科なのだから当然のことで, 非難しているわけではない.

予告:次章(最終章)で次を主張する:



哲学形式の発見 二元論の発見

観念論の発見

「観念論」の真の意味は次の第 11 章 (総括 11.2 内の図式: 実在論から観念論を作り出す操作) で わかるだろう. しかし、やはり、カントを観念論の祖としたい.

- ♠ 注釈 10.10. さて、ここまでで、次の分類を得る (cf. 主張 1.4[哲学者の仕分け]).
- (b_1) : 実在的世界記述 (物理学) アリストテレス, アルキメデス, ガリレオ, ニュートン,アインシュタイン,・・・
- (b2): 空想的言語的世界記述 (西洋哲学の本流) プラトン, スコラ哲学, デカルト, ロック, ライプニッツ, バークリー, ヒューム, カント, フッサール
- (♭3):科学的言語的世界記述 (統計学・量子言語) パルメニデス, ゼノン, ベルヌーイ, 統計学, 量子言語

である.